

平成 16 年 7 月 15 日  
< 4953 佐々木 朗 >

## 高月先生との再会

今、こうやって教師をやっているのも、さまざまな人との出会いがあったからである。私が英語教師をやることができたのも、今思うと、ずっとある程度英語ができたのも高月先生の影響が大きかったと思う。本学で英語を指導している高月晋先生と 25 年振りで再会した。

### 小学校前の看板

私が通っていた小学校は、私の実家のある柏木町から程近い函館市立駒場小学校。もうだいぶ前になるが火災のためほぼ全焼してしまったが、そのことがきっかけになったのか、函館市内の木造校舎は次々と新築された。

それはちょうど私が小学校 6 年生になる時であった。学校前の歩道橋に掲げられていた「米英会話学院 アメリカンイングリッシュスクール」の看板。見ると小学生から塾生を募集している。アメリカン、英会話っていうところに妙に魅力を感じて、親に話してみた。「英語をやってみようかなと思うんだけど。」幸い自分の家から歩いてすぐの女子商業（今の柏稜）高校のところにあっただけでもあり、小学校 6 年生から英語を習うことになった。

小 6 のクラスは、5 , 6 名だったと思う。当時は大先生がいらっしゃって、「I like English」から英語を学んだ。週に一度土曜日の夕方だったと思うが、私の英語とのお付き合いが始まったのである。大文字、小文字、4 線のノートにびっちり書いた。初めて英語に触れる大先生は、私たちに一つ一つをゆっくりと発音練習をして下さり、英語でのやりとりを通して英語を学んでいった。大先生は、いつもほほえみながら、私たちがほめて下さった。私はどちらかというと、途中でやめるといことがいやだったし、英語はとても面白かったので、ほとんど休まずに高月英語塾に通った。

### 大先生が亡くなって

中学校 1 年生か 2 年生の時だったと思う。大先生が体調を崩され、息子さんである晋先生が時々私たちの学年の勉強の面倒を見てくれた。先生は当時ラサール学園で教えながら、函館大学でも教鞭をとり、忙しい毎日であったと思う。それでも勉強の時間前には、よくキャッチボールをしてくれるなど相手をしてくれ、私たちにとっては頼もしいお兄さん的な存在であった。

塾のあったある日、その日は今でも覚えているが、大先生が亡くなった日だった。塾の横の自宅で安らかに眠っていた。そして、私たちは、手をとって大先生にお別れをした。とっても安らかな顔をなさっていた。

それから、晋先生がずっと私たちの面倒をみてくれた。私の中学校の友達が評判を聞いて入塾し、他の生徒もはいいり、また、去っていくなどさほど多くない人数で私たちは英語を勉強した。てきぱきと的を得た指導はわかりやすく、私は先生が大好きだった。その頃、いつも教科書よりかなり早いペースで進んでいたため、英語は私の定番の得意教科になっていた。英語だけは、いつでも自信があって、どんな問題でも100点をとる自信があったし、100点を取れないと、涙がでる程悔しい思いをしたものである。

## 高校に入って

私は東高校に入った。一緒に勉強する仲間もぐっと増えた。自分はある程度英語ができるつもりをしていたが、私のクラスはさらにできる生徒ばかりだった。私は一番の古巣ではあったが、最後の課題ではいつもビリッけつの方で、ようやく先生の「go home」をもらって合格したものでした。先生は最後の方まで残る私に、ヒントやアドバイスを与えてくださり、いつも励まして下さった。そんな厳しい環境ではあったが、先生がいつも温かく見守ってくれたお陰で、何とか英語の成績も私なりにキープできた。

私の学年は共通一次試験の始まった年代である。世間では「マークシート」と騒がれ、何度も何度も模擬試験を受けた。そして1月の試験。確かその前日だったと思う。ほとんどの塾生達は、お休みだったが、その日来たのは、私を含めて3、4人。こんなに少なかったのは中学校の最初の時ぐらいだったろうか。普段の教室満杯から、閑散とした教室で、何か懐かしい気持ちになった。私は、教育大志望だったので、英語の試験はなく、共通一次で終わりではあったが、塾の卒業まで通いつけた。

最後の月謝の封筒には、先生が励ましの言葉を書いて下さった。「朗君、長い間御苦労さまでした。希望校に入れますよう祈っております。高月」先生の小学校6年生から高校3年生になるまでの7年間に渡る指導、そして励ましのお陰で私は無事教育大に入ることができた。

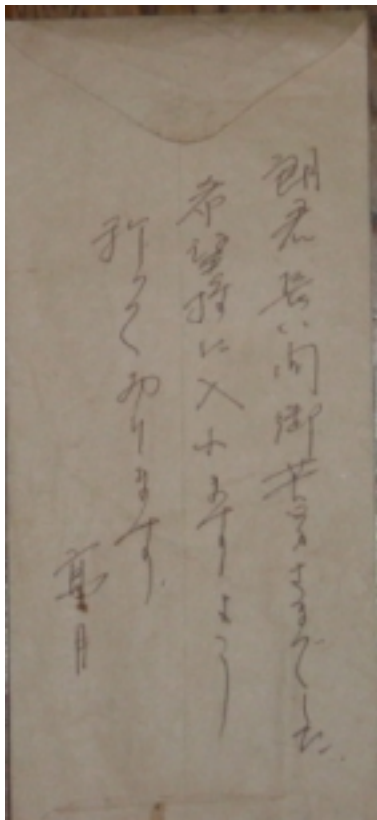
## 高月先生との再会

大学入学のお礼をして以来、先生とはずっとお会いすることがなかった。今年私がこの大学に戻ってきて、シラバスをふと見ると高月先生のお名前があった。木曜日にいらっしゃることになっているとわかったので、今日はその時間に学内を歩いて、ついに先生の姿を見つけ声をかけた。お互い20年以上もたっていたので、それなりの年になったわけだが、先生もすぐに私のことをわかってくれた。ぐっと握手をして、再開を喜んだ。

高月先生のファイトで仕事をされる姿は今も変わらず、多くの大学、高等学校で授業をもたれているとのことである。そろそろあんまり無理しないでほしいなあなどと思いながらも、先生の活躍を陰ながら祈っていきたいと思う。

冒頭に戻って、人生はやはり出会いである。どこで人生の転機になる出会いがあり、また助けられるかもしれない。今こうして教員をやっているのも高月先生との出会いが大き

いと振り返って思う。一つ一つの出会いを大切にしていくことをこれからも心に留めていきたい。



当時使っていた授業料納入袋と先生からのメッセージ